

淨土

本尊阿彌陀仏入仏開眼記念号



昭和四十一年

十一月号

光 運 寺

願此法輪轉運無疆施主益長年

南無阿彌陀佛

大矣哉同受安樂見聞隨喜亦安樂

歸命頂礼阿彌陀尊

万徳円満したまいて

西方浄土に安住し

衆生を利益したまえり

われらこのたび彌陀尊の

悲願を聞くことなかりせば

二たび惡趣に流転して

いつか生死を離るべき

とてもかくてもこの身には

思ひわすらう事なくて

死生ともにみ仏に

まかせ果ててぞ

南無阿彌陀仏



光 運 寺 阿 弥 陀 如 来 像

光運寺阿弥陀如来

製作過程



(1) 粘土原型



(3) 原型より本彫に



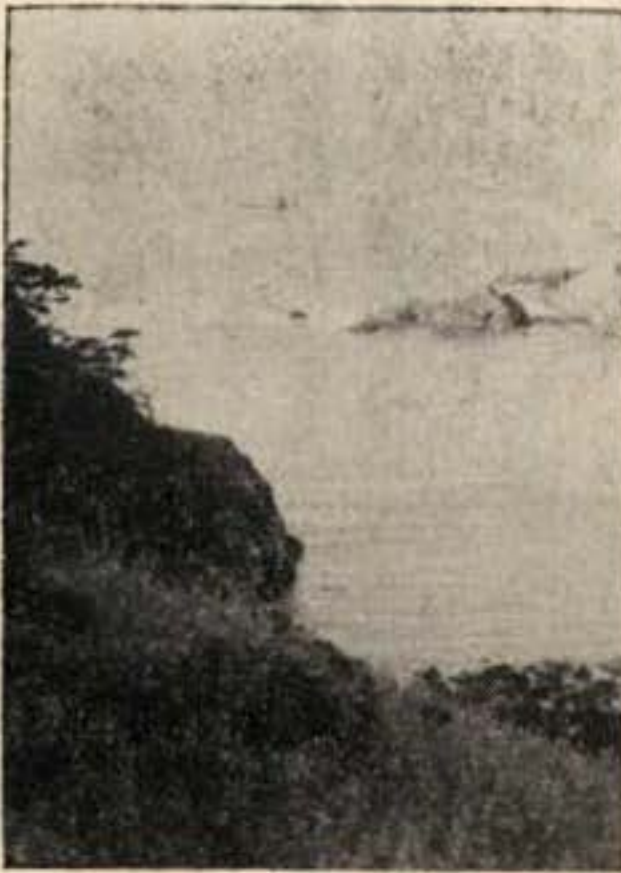
(2) 石膏原型



(5) 仏像・光背完成



(4) 本彫原型の前・後



ただ念仏ばかりをして、
弥陀の本願をたのみて
往生せんとのみおもひてある。

法然上人御法語

— 目 次 —

表紙「芙蓉」錦戸新観画

随想	佐藤治子・岸 覚勇.....	(2)
阿弥陀仏出現	竹中 信常.....	(4)
— . — . — . — . — . — . —		
特集 阿弥陀仏造立の功德		
完全真実のみ仏	椎尾 弁匡.....	(8)
光運寺阿弥陀如来製作に当りて	錦戸 新観.....	(10)
四日市光運寺縁起	飯田 信弘.....	(13)
生身のみほとけ・この本尊に入りたもう	藤井 実応.....	(16)
座談会 「地藏信仰と生活」		(20)
ルポ・「延命地藏尊」霊験は生きている		(24)
— . — . — . — . — . — . —		
心に響くお話し	長谷川 実禅.....	(7)
無媒随録	須藤 隆仙.....	(26)
奈良よりもどって	市原 雅子.....	(27)
ご法語をいただく		(31)
連絡 読者 みんなの法然さま・直実の奇行.....	高橋 良和.....	(28)

《随 想》

司令官交替式

佐藤 治子

六月、七月と二回に渡り司令官交替式に招かれた。六月は米海軍厚木航空基地。七月は横須賀米海軍基地、特に横須賀の基地では体育館のような建物の中で挙行されるので近々と式の模様を見学出来たのである。式場にくと他基地の高官達、又夫人達、一方では日本人の来賓が次々と会場へ入っていくところで、私も日本人接待係りの人に導かれ席に就いた。正面ステージに向って前列の椅子には司令官の夫人、家族そして他基地の高官達。又一方には知事、市長等々が着席して居る。左右には正式の軍服の基地の士官がズラリと整列している。間もなく軍楽隊の吹奏が初まる。

やがて在日米軍司令官、ジョンソン少将、離任される基地司令官と新任の司令官そして二人の士官。計五名の方々がステージへ登り着席される。続いて一同起立の中を星条旗と

海軍の旗を捧げた旗手がしゅくしゅくとしかも足並揃え入場。士官の方は挙手の礼でこれを迎える。気がひきしまる感がある。正面ステージの前で五名の方々の挙手の礼を受け、所定の位置へ進み廻れ右をして一般の席へ向い旗を捧げている。号令の元に一同起立。左端に居られた牧師さんがテーブルの前へ進むと一同頭を下げる。「お祈り」である。そして一同着席、やがて旧司令官がニコヤカに立たれ離任の挨拶をされ、新司令官を紹介される。新司令官は着任の挨拶と前司令官の労をねぎらい、そのあと「皆様……」とはっきりした日本語で挨拶される。いつの間に丁ねいな日本語で私達に分るよう話される事を学ばれたのであろうか。日本にある基地に着任される以上、日本人との接渉もある事で、心新たに就任された事を裏づけされた感じである。次に右端の牧師さんがたち再びお祈りをされた。星条旗と軍旗を捧げ旗手退場、これだけの事である。知事や市長から送別の辞或は歓迎の辞一言あるわけではない。短くけれど実に壮重、そしてスカッとした式であった。四五年前の交替式には司令部の庭で挙

行された。立つと背の高いアメリカの人達にかこまれて背のびしてものぞきみる事も出来なかった私は、旧司令官夫妻と色々話し合った事もある親しみも加わって居った事とて短いけれど式の進行の仕方によって十分なのだといふうなずき感激しつつレセプションの会場へと向った。

会場では旧司令官夫妻が新司令官夫妻を長い列をなして御挨拶する来賓達に紹介されていた。そしてその翌日日本を去られたのである。厚木の時は一人の牧師さん（チャープリン）といって士官の待遇である）がお祈りをされたと記憶している。この度は二人。私はアメリカの人にその理由をたずねた。「恐らく宗派がちがっていらっしやるかも知れない。それで所属の教会のチャープリンがそれぞれお祈りを受けもたれたのかも知れない」という事であった。私は確かな事を知りたく司令部にたずねてみた。二人のチャープリンはハーティガン前司令官が特に親しくして居られた事からお二人にたのまれたのであるとの事。「一人にせよ二人にせよ、お祈りにより式が初まりお祈りにより式を終了する事にな

っています」とつけ加えられた。

アナポリス海軍兵学校で白手袋をして足並を揃え士官候補生が教会へ入って行く光景をまざまざと見て来た私は、こういう大切な式に必ずお祈りにより式が初まり、お祈りにより式を終了させるその事に心打たれるのである。どこの国にも人それぞれで、千差万別である事はいうまでもない。信仰の深い感じもある。私は栄えある式典に宗教的な行事をとり入れることが習慣になっているアメリカの式の運び方に關心をもち羨ましいと思うのである。

最近アメリカン、フィールドサーヴィスの交換学生となり一年間各家庭に住んで勉強して来るといふ二人の女子高校生が偶然と私の知人の町へ行くという事から会いに見えた。私も色々の家庭に招かれた時、先ず御主人がおいのりをしてからお食事を頂くといふ習慣になっているのを経験して来たのであちらのこ

婦人もある。私もロータリークラブの会合に食事前のおいのりをしている声を通りすがりにきき、ふと足をとめて耳をすまして聞いていたこともある。(小さい町での事ではあったが。)

仏教の国とかシントイズムとかいわれているこの日本で、もし国会の開会に各宗教の代表が交替に一人ずつ出て「祈り」により国会が初められるようになれば、あのテレビでみる乱闘さわぎもだんだんと反省してもらえるのではないであろうか。神仏に心の誓約の一刻は私達にしゆく然とさせるものがある。短くしかも壮重なこの式は中座して立去る人もなく、実に印象的であった。

月に二つの「行」

岸 覚 勇

現在の私には、月に二つの「行」がある。

一つは十四日の別時念仏であり、一つは月末の下肥えの汲み取りである。別時念仏では十数人の信者と共に、声々唱うる念仏の中に、汲めども尽きぬ法悦に涙し、下肥えの汲み取りでは、我れ猶健在のバロメーターとして、心

からの悦びを感じる。

後者は戦後、下男も居らぬのでつい始まったのであるが、また私には支那出征時の労苦の思出となるので、市役所の清掃課に頼んだらという家人の言葉を退けて、今も猶その「行」を続けている。

然しその「行」を終えて、満々と湯の湛えられた風呂に入り、思わず南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏とお念仏の出ることは、現在の私にとっては、他に類例のない大きな悦びである。ある哲人はいった、肉体労働後の小憩にこそ、真の人生の幸福を感じると。いま私は事実、この種の悦びを感じ、私の健在である限り、その「行」を続け、人生の幸福を万喫したいと思っている。

本誌「正月号」に、正大学長佐藤密雄博士の「リヤカー引いて廃品廻集」の記事を見てあの貴族的な学者がと、大いに驚いたが、僧侶にはやはりその種の一面があつて、よいのだと感じ、また私は佐藤博士ほどの地位も学問もないが、やはりこの下肥え汲み取りの「行」も、必ずしも恥ずべきことではないとの自覚を新たにした次第である。

阿彌陀仏出現

竹 中 信 常

(大正大学教授・文博)



一

釈尊が八十才でなくなられるとき、枕頭に集まったひとびとに、最後のおしえをのべ語られた。

「……われの死した後において、みずからを灯明としみずからをよりどころとし、他人をよりどころとせず、法を灯明とし、法をよりどころとし、他をよりどころとすることなく、修行せよ……」

釈尊のないあとは、めいめい自分をすっかり自覚し、釈尊の教えを守って修行せよといわれたのである。それゆえ、当時の仏教には拝む相手はなかった。ただ、深く自分を反省し、仏のおしえを実践すればよかった。釈尊の生きておいでにな

る間はこれでもよかった。悲しいとき、まよったとき、苦しむとき、そんなときには釈尊のところへいって、その温容と慈声に接すれば、たちまちのうちに、悲しみも、まよいも、苦しみも消えて、限らない喜びと、どっしりとした安心感にひたることができたのである。ちょうど、おさな子が母のふところを抱かれたように、おそれるものなにもなく、たより切れたのである。……ところが、そのたよりにしていた釈尊がなくなったのである。母を失ったおさなごのように、ひとびとは深い悲しみと限らないおそれに見舞われたのである。それでもまだ、釈尊の生前からつかえていた弟子たちは、釈尊の想い出を胸に秘め、なにかのときには心にそれを描い

て、みずからをなくさめることができた。しかし、ときがたつにつれて、その印象もだんだんにうすれるとともに、釈尊の滅後に仏教に帰依したひとびとにとっては、そうした想い出も、印象もなく、ただおのれを反省、おしえにしたがえといわれても、あてのない旅路と同じでたよりない感じが深まるばかりである。

幼時、母を失った子が成長するにおよんで、母の写真をかざり、なやみ、くるしむときにこれにむかって語りかけ、うったえかけることによって、いささかのやすらぎを覚える。これと同じく、仏弟子たちも、釈尊の最後のおしえを守りながらも、心のやすらぎを得るために自分たちの印象を紙に描き石に刻し、釈尊のありし日の姿を再現することに努めたのである。

このようにして今日、わたくしたちがみる仏像がうみだされたのである。

二

近來は仏像ブームで、わたくしたちはいろいろの仏像をみる機会が多い。そして思うことは、一口に仏像といってもその種類の沢山あることである。解説書をみると、いわゆる仏像のなかには、如来仏像のほかには菩薩像あり、明王像あり、天神像あり、如来像にも釈迦・薬師・弥陀・大日・盧舎那な

どがある。如来は仏陀の別名で、眞実をのべ伝えにわれわれのところへ来たものという意味である。その如来の中で、わたしどもがもっとも親しみをもち、また実際にわたしどものなやみを救ってくださるのが弥陀如来、つまり阿弥陀仏である。如来はまた如去ともいわれる。いわばすでに去った仏もあるのである。ということは、釈尊を失なったひとびとがその空虚な悲しみにひたっているとき、胸に浮んだことは、仏はひとり釈尊のみではない。釈尊以前に多くの仏があらわれ（如来）そして、おしえをひろめて去っていったので（如去）仏を失った悲しみはわたしたちだけではないのだ。そう思うといくぶん心も軽くなったのである。こうして、しばらくの間は「過去仏」の思想がおこなわれた。

ところが、いくら過去に仏がいたとしても、現実のこの悲しみ、なやみをいやしてはくれない。人は一体、なにを目あてに生きているのか。そう思った思いがひとびとの心に去来するようになった。いまは仏はいない。しかし将来、かならず仏があらわれて、なやめるひとびとを救ってくださるのだ。それを楽しみに待っていよう。こう考えると、希望もわいてくるようである。ここに「未来仏」の思想がうまれた。将来、トソツ天という天国から、ミロクという仏がこの地上に舞いおりてきて、ひとびとを救ってくださる。それまで、

一生懸命に仏道にはげむべし、ひとびとはこれを信じて、ミロクの当来をまつたのである。

ミロクはいつきてくれるのか。一日も早くきてほしい。しかし、お経に説かれているところによると、それは五十六億七千万年の先である。気の遠くなるような未来なのである。とてもそれまで生きてはいられない。きくところによると大蛇は何千年も何万年も生きられるとのことだから、いっそ大蛇になってミロク仏の当来を待とう。こう思って遠江笠原の桜ヶ池にとび込んで大蛇になったのが皇円という天台宗の坊さんだった。これほどまでに、ひとびとは、なんとかして現実、この目で仏を見、この耳で説法をききたかったのである。

三

皇円が大蛇に化身してわずか六年のうちに、そのお弟子の法然上人が浄土宗を開かれた。師匠の皇円の悲愴なねがいのままの当りにみた法然上人は、なんとかして、遠い昔でも、はるかなる未来でもなく、現に、いま、ひとびとのいきているこのときにおあいできる仏をさがしたい。そうおもわれると懸命になって経典をひもどかれ、そのあかしを求められたのである。血のにじむような努力は立派に実をむすんだ。アミダ経のなかに、

「これより西方十万億の仏土を過ぎて世界あり。名づけて極楽という。その上に仏まします。阿弥陀となづけたてまつる。いま現にましまして、説法したまえり……」

ひとびとよ、悲しむことも、なげくこともない。仏は現にわれわれと同じときに極楽世界においでになるのだ。しかもその仏は、無量の寿命と無限の慈悲をもつ阿弥陀仏である。臨終一声の念仏さえとなえればみずから山七彩の雲にのっておむかえにきてくださるありがたい仏なのである。このことをもう少し早く知ったなら、師の皇円が大蛇に化身するのをとどめることができたろうにと、法然上人はなげかれたのである。

ひとびとの仏を見、仏に会うねがいはかなえられるのである。思えばそれは永いねがいであった。釈尊がインドでなくなられてから、法然上人が浄土門をお開きになるまで、千七百余年のあいだ、抱きつづけられてきたねがいであった。それがかなえられたのである。浄土教のおしえを守り、称名念仏をしさえすれば、阿弥陀仏はつねにわたくしたちのうえにあらわれるのである。これほどたのしく、たよりになることがあるであろうか。

しかもわたしども浄土のおしえを信ずるものは、もう一つ

のよろこびがある。それは阿弥陀仏の尊像をもっているということである。浄土宗のお寺にいけば本堂の正面にその尊容を仰ぎみることが出来る。また各家の仏壇の中心にも、絵像、彫像が安置されている。現に、極楽世界においてになる阿弥陀仏がこのような各寺各家の本尊として、わたしたちの目前にあらわれてくださっているのである。なにごとによらず、ものを考え、ものを念ずるとき、なにもない空間にむかうより

はそこに、現に、はっきりとした形であるものにむかつてすることが好ましい。浄土宗の念仏はただ黙って、心の中であるのではない。阿弥陀仏の名を呼び、となえる念仏である。それには、現に、自分の目の前に悠容としてまします尊像にむかうほうが、わたしたちにとっては念仏をとえやすい。阿弥陀仏は、現に、いま、わたしの眼前にその尊容をあらわしたまったのである。

心に響くお話し

長谷川実禅

私は先日とても良いお話しを伺って何んともいえぬ嬉しい気持ちになると共に、自ら省みてその遠く及ばないのに深く愧ぢ入りました。

さて、そのお話しとは、或る石屋さんの社長から伺ったものです。その方の少年時代の事、夜中に雨が降ると、そっと起きいでて新仏のお墓にシートをかけに行かれたそう

です。仏様もきっと寒かろう！ 冷たかろう！ と思ひまして……と言。私の眠っていた心の琴線にチーンと響くものを感じました。皆様は之をどう受けとめ、どうお感じになりますでしょうか？。もの言わぬ石塔を恰かも生ける人の如くに同一視し、少しも淋しくなかったと……。無意識の中の純粋な宗教心、生活の中に脈々と波うって流れる仏心とはこう云うのではないかと、さりげない行為の中に伺われる温かい宗教心をこそ自他共に育ててゆきたいものと念ずる心や切なるものです。

天高く心果てなく深みゆく

完全眞実のみ仏

椎 尾 弁 匡

(大本山増上寺法主)



四日市市光運寺は明治以来教化に努め、信徒多く集り、然るに昭和の戦火は堂宇仏像皆ことごとく焼失し、以来現住董職再興に努められ十一月三日入仏法要を営むこととなる。経営労苦容易ならず、唯大信の力よくこれをいたせりと言うべし。飯田上人弥陀信仰の重点を記して青少年の入信を助けよと案ずるに人間に仏陀の出現は釈尊の成道による。経にいわく仏の成道したもうや過去の多仏を礼し未来の多仏を礼したもう。このことを過去と未来の仏を現在仏は礼したまえりとして三世一切のものが皆仏として礼することゝを明らかにしたるは、いまだかつて見ざりしところ、故にこの仏を世中の最尊とすと言えり。何ものをも大唐の善

導和尚は我等愚痴のみ、今釈迦仏末法の遺蹟に逢う、それを三部経に発見されたとなっておる。私はそれを簡単にいただくのは阿彌陀経によるが良いと思った。計らずも高等小学の先生が新たに編入の私に極楽はどこにあると聞かれた。十二歳の私は西方十万億の仏土を過ぎて世界あり、名づけて極楽と言う。その土に仏まします、阿彌陀と号したてまつる。舍利弗^{シャリフ}彼の土を何が故に極楽と名づける。衆々の苦しみあることなく、ただ楽しみのみを受く。故に極楽と名づく。これは極楽の要門と善導大師はいわれる説明であり、私は高小の加藤先生といい争って正しき教説と主張したが、どこまでも正しき教説と言いうるか現に梵本が有

っても三蔵羅什が手習い本として作ったかもしれん。釈尊がその通りお説きなされたとは言えぬかもしれぬ。それでも観經の梵本の無い物よりも仏説の經文と認めやすい。經意は大經に近かい。大經は早く數訳ある中に後漢の安世高が第一に訳したと道宣律師は伝えておるが古くから安世高訳とする。三十五本の内には無い。安世高は有部小乗の學者であつて大乘菩薩ではない。十二訳五存七欠というは誤まりを伝えたもので浄土宗全書にまとめ

てある大經訳が全部に近かいものである。これによれば大經の異訳はつきる。阿弥陀仏は光明仏として「無量光」「無遍

光」「無礙光」「無對光」「焰王光」「清淨光」「智慧光」「歡喜光」「不斷光」「難思光」「無說光」「長日月光」と十二光仏の訳も有る。また無量壽の願もあり弟子無量の願もあつてその訳名も有る。それはあらゆる所、あらゆる時にましますとのことで一切の命の親でありどこでも照らし、どこでも生かすお力であると言うことで、私共が空間、時間を

考える時まず必要である条件である。西洋哲學では批判論をやったカント先生が感覺の先天形式と言ったこともこのことである。阿弥陀様は感覺が一つでも成り立つ所では在りまさねばならぬ。このことだけでも極樂は有るはずである。

阿弥陀經の六方諸仏の護念くださることも、四十八願とか四誓偈とかいう一つ一つの問題はこれまでの仏として成

り遂げました、仏

願、仏力をまとめたことである。これを本願成就身の阿弥陀仏と申す。現在はある光明となつて光明攝取身の阿弥陀

仏と申す。未來は來迎引接身の阿弥陀仏と申す。

過去と現在と未來と三身三世即一の阿弥陀如來と申すのであり、お釈迦様もこの阿弥陀様の一つである。

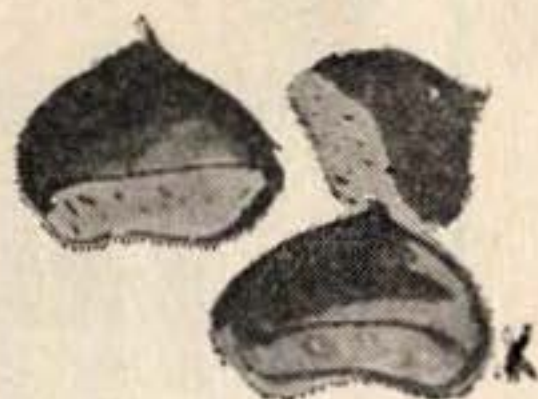
これを善導様は四十八願で阿弥陀様も極樂も出來上がるとなさるので一つ一つ拾ひ集めた出來合ひではない。完全真実そのものである。

天水俱為鏡香華同作雲
業深定易往因淺實難聞

阿彌陀
佛

光運寺阿弥陀如来

制作に当りて



錦戸新観

藤井実応先生の御紹介にて昭和三十九年三月二十九日光運寺様が初めて御尋ね下さった。藤井先生からお人柄の程も承って居り



ましたので、御本尊建立についてもすぐに了承することが出来ました。戦災で焼失する前の伽藍の配置等も承り、由緒ある名刹の程も知り御本尊建立の制作についての心構えも出来ました。それに私の心服いたしたことは、長年沢山の方々に御目にかかり仏像も作らせて載いて居りますが、おおかたは、庫裡本堂を先に造り後御本尊に着手する傾向が多いのであります。ところが光運寺様は御本尊を先に作りたい、形ばかりのものでなく、立派な遍十方に輝く、み仏をとのことにて、日々朝夕の礼拝の中に弥陀

の姿を見て、このようなお姿をと申されてこられました。私は御仏像についての深い御関心と御信仰に非常に胸をうたれました。

今度の御本尊は今迄あまり、こころみられなかった様式（肉体は漆下地に金粉をまき、他は金箔の上に淡い着色其の上に模様をかく）をとりました。

阿弥陀様の世界は莊重であり華麗であるところこそ極楽浄土にふさわしくはありますまいか、仏体に接し心のやすらぎと美しさのなかにとけこんで自然に御念仏のであるような姿をと思い、そのような意味をとらえまして全部金箱押しのみままでなく金箔の上に彩色をほどこしたので御座居ます。

これによりまして、やわらかさと、温たかさとをかもしたし、肉体の金粉まきは深い沈んだ金色にて弥陀の尊容が重厚な壮麗さをもし出す結果となります。

素材は仏体より台座光背にいたる迄木曾の檜材にて糸をたたんだような木の目をした何百年かを待たせた大木にて胎内はうちくりをいたし願文や制作年号が記入されてあります。

制作の様式は藤原時代の様式をとり入れま

した。宇治の平等院、日野の法界寺、松坂の清光寺様へ参拝御手数をわずらわしました。亦福島県の白水の阿弥陀堂等処々参拝拝観を重ねて研究いたしました次第です。

仏身は座像二尺三寸五分総丈六尺三寸八分蓮弁は弥陀の四十八願になぞらえて四十八辨となし、九重の台座に組みたてました仏像は発願主の心が御姿に現われるとも申されます。古代の仏像を拝しますと願主の御誓願がうかがわれます。

あらゆる一切は因縁処生のところ、光運寺御本尊造仏も、偶然の結びつきとは考えられません。万物は生々流転してとどまるところなく、永遠に移りかわってまいります。音楽も絵画も彫刻も然し何時の時代に依つても真実の美は、常に新らしい息吹きを私達の胸に訴えてまいります。

古代の仏像に於ても埃りにまみれ、風雨に磨滅しても優れた仏像は無言のささやきを感じさせてくれます。

飛鳥には飛鳥の世相が天平には天平の世相がこもっております。古代の仏像の前に立つた時尊容に驚愕すると同時に如何なる御誓願

のもとに、このみ仏は建立されたのであろうと考えさせらるることもしばしばあります。ともあれ人間が人間であるかぎり神仏への祈念はつきぬことでありましょう。

その祈念の対照たる仏体は如何にあるべきかとは作者のもっとも苦悩するところであります。偶像と思うも真仏と思うもみな自己より起る一念のしからしむるところではなからうか見て美しく触れて尊いみ姿は誰人も好むところでありましょう。時代が作品を作り人が作品を作るのです。仏像においても時代相を呈して、仏そのものにもっとも近い姿に迫



師 戸 錦 の 中 作 製

ると云うことは洵に至難なことで御座居ます。古代と現今を問わず仏像を拝しますと、いろいろと感じさせられます。

新らしく作った仏像でも生新さなく生命の息吹が感じられない作品、古代の作品(仏像)でも実に漸新な生々とした生きた作品、このような仏像は永遠に変わることなく私達に新しい生の息吹きを伝えてくれることでしょう。且つまた彫刻的な作品(骨組、肉付け共に立派)もあります。更にまた彫刻を越えたところの、仏そのものと思われるような美事な仏像、その一例をとりますと奈良興福寺の十大弟子は天平時代の作にて乾漆像でありますが、その前に立ちますと、いつしかお釈迦様とお弟子様方の問答を聞く想いの中にとけこんでしまいます。像のもたらす神秘性と云うか、無言でたてる富楼那や羅睺羅が「世尊よ」と呼び奉りて至心にみ教を乞い奉り、またお釈迦様は「富楼那よ羅睺羅よ」と親しく呼びかけては懇切に御法を説き給う姿を仏像を通して想起させるので御座居ます。

仏像と、木像絵像にかかわらず、仏そのも

のに肉迫せねばならないとしみじみと考えさせられます。

それには深い信仰と高邁な理想と写実が、優れた技術に依って表現せらるるものではないでしようか。

この度光運寺様の御本尊阿弥陀如来は、私の阿弥陀如来としての最初の大作にて、洵に良い御因縁を結ばせて載きましたことを深く感謝いたすと同時に、藤井先生並に総代様や御関係の方々の御支援を厚く御礼申し上げます。

彩色は当代の大家磯貝玉洲、磯貝玉峯両先生が精魂を傾けて下さいました。

「観音に住して観音を看

不動に住して不動を刻む

悠久芸術の道

如法無限につづく」

「仏像とは真仏なり」

錦戸師仏像関係彫刻略歴

昭和五十年	高村光雲・山本瑞雲師事	昭和三十四年	明王内陣安置（総丈六尺五寸五分）
昭和十三年	成田不動尊・目黒不動尊三尊仏模刻	昭和三十七年	立正佼成会久遠実乗釈迦牟尼仏制作
昭和二十二年	第四回日本美術展覧会に十面観音出品	昭和三十九年	大本山浅草寺宝蔵門安置の阿形像仁王尊制作
昭和二十三年	戦没者供養のため福島県小名浜自性院に聖観世音安置	昭和四十一年	三重県四日市市光運寺阿彌陀如来原型制作
昭和二十四年	第六回日本美術展覧会に観自在出品		一月二十三日・二月十四イソド・セイロン・タイ・香港等仏蹟参拜、セイロン国繪督ウィリアムゴバラワ閣下に浅草寺より自作八角厨子入白檀聖観音像奉呈
昭和二十六年	第八回日本美術展覧会に不動明王三尊仏出品（三体群像）	二月	光運寺阿彌陀如来木地完成
昭和二十七年	救世観音（極彩色仏像個展出品作）	三月	セイロン国イムルムニヤ寺院に浅草寺より自作厨子入釈迦如来像奉呈
昭和二十八年	不動明王・台座・光背を作り日展に出品護国不動と銘名（大本山音羽護国寺本堂に安置・総丈一丈六尺）	六月	大本山川崎大師平間寺に昭和三十二年於高島屋出品作救世観音像安置
昭和二十九年	聖観世音（七観音の内・総丈九尺）	八月	伝教大師御幼形像を滋賀県大津市坂本本町生源寺に奉安
昭和三十一年	大本山浅草寺大梵天王・帝釈天王木地完成（四尺八寸）	九月	光運寺阿彌陀如来本尊彩色完成
昭和三十三年	日本橋高島屋に於て仏像個人展開催		
昭和三十三年	大本山川崎大師平間寺愛染		

起縁寺運光市日四

弘 信 田 飯



この度本尊阿弥陀仏が造顕せられましてお迎えすることとなりました。これはひとえに仏願の顕現と心から悦んでおります。本尊造顕の大業が成就されましたこのお寺は三重山大知院光運寺と称し、開基上人は聖覚上人、開山上人は源譽超順上人であります。

当光運寺の創立は今から六百六十五年前の正安三年二月で西暦一三〇一年に明観上人によって開かれております。

寺伝によりますと（四日市史所載四日市図書館蔵）『往昔上野国国府に住する明観法師なる僧が

祖父明円法師の夢告を嗣ぎて安居院の墓詣の途次当地に掛錫して念仏の衆徒を結び、一字を造立して三重山東源院尊乗寺と号し、唱演の道場とした。』之が当寺の創立であつて時は、正安三年二月である。『この年法師上洛の帰途尊像を荷負し来り、衆に示して曰く、「是は我等の大先達なる聖覚上人である。有縁の地たるに由りこの道場に留め置く。永く開基上人と尊崇せよ。我亦毎年往返の際七日の念仏を修めよ。衆夫れ往年浄土の念仏を退転すること忽れ」と衆之を信受し奉行した。』時の人は之を聖覚同行と称した。』

と記るされておりますが始め草庵を建て安居院の墓詣の往き返りに立より、時には説法し、念仏の道場としていたものを時を得て一字を建立するに至ったものと思われる。明観法師が聖覚上人に帰依し専修念仏の行者であったのは祖父明円法師からの相承によるものである。更に明観法師は安居院の旧跡（京都安居院花の坊を念仏の本所と仰いでいたので毎年本所をたずねて浄土法門の教えを聞き多くの人々に伝えております。舜昌という人が後伏見天皇の勅命によって書かれた法然上

人行状画図四十八巻伝別名勅修御伝第十七巻に「或年明観上洛の時、憲実法印の嫡弟憲基法印にのぞみ申様この念仏尽未来際退転すべからざるよし、僧衆の中に御下知下さるべきよし申けるによりて弥陀本願の念仏は濁世末代の出離觀脱の要法なるいはれ、尽未来際退転すべからざるよし、態懃に書下されければ御下知の旨にまかせて、ひとへに本願をあふぎ、念仏退転あるまじきよし、像衆等請文をささげ、念仏いよいよねんころになりけれ



ば、国中の貴賤帰敬の掌をあはせて、結縁のおもひふかし。」と書かれているように憲基法印の「お書き下された文」をいただき衆に示し、念仏の本意とするところを多くの人々に教えているようです。当寺の創立に当って憲基法印の「御文」を衆徒に示し、念仏の要法などお話しして縁を結んだことと思われるます。勅修御伝四十八巻の著者舜昌という人は後の知恩院住職第九世で、編纂した当時は四十三才位、正安六年（一二九九年）でした。この年の翌々年正安三年（一二三〇一年）明観上人は聖覚上人の尊像を安置して、創立のことは衆に知らして念仏の道場を起立しているのであります。この時の尊像は応仁元年（一四六七年）応仁の乱の時、兵火に罹って堂宅は灰燼に帰したけれども、聖覚の像は太田某なる信者によって幸いに災害を災れ、伝々相伝されてきましたが、昭和二十年の戦災で焼失してしまいました。明治十七年光運寺に福田行誠上人（知恩院七十六世）が仮寓した時聖覚の像に謁し感激のあまり一文を書し、一軸に衣装せられたものが今尚四日市善光寺に保存されております。

明観上人により聖覚を開基として起立された当寺は、一四六七年五百年前の、応仁の乱による兵火で灰燼に帰し、次第に衰微して文明四年（一四七二年）には全く結衆を失ってしまった。約五十余年の後、文明四年より源誉上人によって当山再興の事業が始まるのであります。

寺伝は次のように記しております。

『源誉上人再興を切願し累年此所に掛錫して一万日（約二十七八年）の念仏を興行し再び同行を結んで法転を転じ一宅を建立して知恩院第二十七世徳誉光然上人により真言宗より浄土宗に改め、三重山大知院光運寺と称して念仏の道場を開いたが、寺院としての堂宇の完成を見ないで文祿三年（一五九四年三七三年前）九月二十七日示寂した。寿七十七才、之を当山第一世とする。爾来その嫡弟円誉伴旧和尚が師の宿願を嗣ぎ清誉是法（伊藤喜右衛門の先祖）という者の協力を得て、慶長十一年（一六〇六年）三六〇年前堂宇の完成をした今の本堂則ち之である。（戦災にて焼失）茲に於て伴旧和尚に聖覚上人の尊像を開基と仰ぎ源誉上人を開山として尊崇した。』源誉上

阿彌陀佛



人は念仏の道場を再興しようとして実に長い年月を要して法灯に火をともし、第一世円誓上人の代に完成したのであります。

時は慶長の初め家康による天下統一の事業が着々と遂行されつつあった時代で四日市は慶長五年八月家康の領地となり徳川時代を通じて御天領四日市となるのである。知恩院末としての光運寺は家康の浄土宗帰依とあいまって別格寺院となり愈々念仏の道場としてのこの時代における寺院の体制をととのえ教線拡張を遂げてくるのであります。時代は下り元文二年今から二三〇年前第十世戒誓上人によ

って旧西町の辺りから現在の地に移転し境内も拡張されて再建され、これを記念して「供養經石」が建立され今も尚本堂南にたてられている。碑面には「北勢三重郡三重山光運寺易地再建既而……宝歴四年歲次甲戌春三月応光運現住戒誓上人之遍請誌焉相州鎌倉光明寺六十五世賜紫沙門麗誓善阿」ときざまれております。この時建てられたのは山門で元文二年建立の記録があったと寺伝に記るされてい

る。更に明治二年大津県に提出の由緒書には末寺七ヶ寺寺院名列記の記録があり名実共に御天領四日市浄土宗別格寺院として本来の面目が發揮されてくるのであります。

当寺に安置され多くの信者が帰依している延命地藏尊はおそらく開基上人時代からあったのではないかと思われま

す。而し現在の地藏さんは第九世乾誓上人の夢告の発願によるものであります。寺伝には「享保十年二四二年前乾誓上人が本堂に於て別時念仏を修し四更に及んで睡氣を催し經机に倚り累り居らるる時、夢頭に延命地藏出現し『我は此所より辰巳の方の樹下に停てる石蔵なり有縁の心願者を救済せん』と言ひ終らざるに醒め、茲に於て上人此の靈夢に由り翌朝樹下より当山に移したものである。」と記録されている。爾来延命地藏尊の信仰は盛んで日毎に参詣する信者がかか

生身のみほとけ

この本尊に入りたもう

藤井実 応

本日ここに光運寺本堂に新しく御本尊をお迎えして遷坐大法要の行われますことは誠に同慶に堪えません。真に有難く、目出度きこととであります。御本尊をお迎えすることの出来ましたのは当山御住職飯田信弘上人はじめ檀信徒各位の発起発願に基き一切有縁の方々の御協力によることでありまして念仏同行の一人として感謝に堪えない所であります。

この本尊阿弥陀如来像の造立についてはすでに御報告あり御承知のことですが、それに関係ある一人として、私の知っている一端を申し上げたいと存じます。昭和三十九年の三月十九日、当山（光運寺）の彼岸法要の法話に参りました時、飯田師から光運寺は戦災により焼失したがそれ以前の本堂の荘嚴のことを思い、今後、寺を中心として仏法興隆を期する為、第一に御本尊をお迎えし御本尊にふさわしい本堂にしたいとお話が出ました。私はその時その尊い発願に随喜し仏像の作者については錦戸新観師のことをお話し、その方をお願いしてはとおすすめ申したのです。飯田師は二十八日頃、故佐藤賢順上人三回忌法要に上京するから、その際おたずねしようと申され、そのとおり最初の訪問がなされ、次で総代さんらと共に錦戸師をたずね



仁王尊像（錦戸師作）

られることになり、本尊製作についての依頼、契約も成立し、爾来、錦戸師は専心日々念仏しながら製作にとりくみ、飯田師もしばしばお訪ねになつては意見も述べられ、打合せもせられ、みなさまの御協力の下に、ここに阿弥陀尊像、出来あがられました今日を迎えるに至ったのであります。

この御本尊の製作者であられる錦戸親観師は、仏像彫刻家として、又仏道修行の体験人格者として常に尊敬申し上げ且は親しくさせて頂いている方であります。初めてお会い致したのも実は観音さまのお引合せであつたと私は思うております。昭和二十六年八月でしたが、私は浄土宗の教師養成講座の講師として、会場の東京、九品仏として名高い浄真寺に、二十一日間起居寢食を共にして教師補の方々の御世話申したことがあります。九品仏開山堂の一隅の室を私の控室として寝泊りしていましたがすぐその近くにある観音堂へ毎日お参りの熱心な女性がありました。ある時「日々御熱心にお詣りで有難いことです」と申上げたのがきっかけで、その女性（お医者さんでした）は或日、錦戸師と一処に私を訪ねて下さいました。信仰のことについても話がはずみそれ以後意気投合と申しましょうか、誠に親しくさせて頂き、上京の度毎にお訪ねするほどになりましたのであります。アトリエには今迄に製作された、すぐれた数々の塑像や或は出来上った観音菩薩等

の彫像がありまして、その気高い美しさにひかれたのであります。恰度その頃丈六の不動尊像製作中でありました。廿六年の三月不動尊製作の誓願の下に栃木市の出流山（真言宗の寺）にて毎朝三時起床、朝は心経百巻、夕は聖不動経百巻読誦、滝にうたれて不動尊の示現を仰がれ靈感を得られ、製作にとりかかり同年秋十一月に出来上ったのです。私はその出来上ってゆく過程を殆ど見せてもらうことができました製作中も午前三時起床、水行、香をたいて心経百巻読誦等前述の通り、不動を念ぜられての製作であります。出来あがった不動尊を仰げば智慧の剣を持って煩惱悪魔を制伏せんとの憤怒のお姿、じっと手を合せて拝んでいると、そこにはどこもなくただよう慈悲のおすがたが感ぜられ、二童子の姿にもどこか昭和現代の様相も見うけられ、現に生きて在すみ仏に接する思いでした。その不動明王三尊仏は日展にも入選されたのですが後に縁あって廿八年に真言宗の本山、東京の護国寺本堂に安置され祭られて日々拝まれておるのであります。観音像を作る時には、同じように朝念観世音、暮念観世音であり、アミダ尊像を作られる時には日々念仏称名の中に、所謂一刀三礼、拝みに拝んで造られるのであります。

東京、浅草寺の内陣御空殿両側の脇待、大梵天王、帝釈天王や川崎大師平間寺の内陣に安置してある愛染明王や立正佼



救世観音像（錦戸師作）

成会本部講堂の本尊久遠実成の釈迦牟尼如来像、浅草寺宝蔵門の二王尊（阿形像）など、みな師の作であります。天台宗の僧籍にもあられ、昨年は印度仏跡もたずね、専心仏像製作に精進せられています。

かかる師によって、かように拝みに拝んで満三年に近い歳月を費してこの本尊は出現されたのであります。

さて仏の功德について経や論の中には、仏は無量の身がありますゆえ、或は一身を説き、或は二身、三身、十身等が説かれています。ここには一番分り易い真身と化身の二身に分けて説明申し上げます。

真身とは真実の身であります。無量寿経には、法蔵菩薩が四十八の大願を発し、長い間の修行によって報いられた御身であることをくわしく説かれています。観無量寿経には

「無量寿の御身の色は百千万億の夜摩天の閻浮檀金色えんぶたんごんじきのようである。御身の高さは六十万億那由他恒河沙由旬にも超えさせられ、眉間の白毫は右にうねりうねって大きさは須弥山を五つ合せたかのよう。御眼は四大海の水の如く、瞳と、白眼とがはっきりと分れている……また無量寿仏の御身には八万四千の勝れた相すがたがあつて、その一々の相には更に八万四千のこまかな相があり、それぞれのこまかな相には、また八万四千の光明が具っている。一々の光明は遍く十方世界を照らして念仏の衆生を攝取して捨てたまわぬ」とあつて、真身の相を一応具体的に説かれています。私共にとつては到底見奉ることは出来ない、ただ念仏してその光明摂化を頂くことができるのと仰ぎ信ずることによって接することのできる宇宙遍満の御身であられます。

次に化身とは、機（人間）に随い、時に応じてその身を自在に化現して、人々を御導き下さる御身であります。経にも「或は大身を現わして虚空の中に満ち、或は小身を現じて丈六八尺なり」とあります。円光の化仏、攝取不捨の化仏、来迎引接の化仏等捨々の相を以て化現したものです。

阿弥陀仏に限らず、一切の仏は黄金の色であります。「これは不変常住の相を現わさんが為に黄金の色を以て現わすのです。それゆえ仏像をつくるにも白檀の彩色なども功德を得られぬではないが、金色につくるは即ち決定往生の業因である」と法然上人も仰せられています故、この本尊も金色であります。

今この本尊阿弥陀如来は宇宙に遍満なされている真身が私共を導き救わんが為に、私共にも分るように慈悲円満な相を以て、現われ下さった化仏と申さねばなりません。經に

仏身を見るものは仏心を見る、仏心とは大慈悲是なり

とあって、絶対大悲のみ心が、この尊像にあらわれています。この尊像を至心に仰ぎ拝みますと、「仏心とは大慈悲是なり」のお心が分り、み心を心としてゆくように導かれます。仏教は所詮、慈悲ある人あわれみ深い人間になることである。仏像を拝むことによってかように導かれるのであります。又阿弥陀經に

「今現に在して説法したもう」

とあり、觀無量壽經には

「念仏の衆生を攝取して捨てたまわす」

とある。この御本尊はまさに私共の拝しうる今現在説法の阿弥陀仏であり、また攝取不捨の阿弥陀仏であります。法然上

人御法語に

「生身しやうじんの仏此の本尊に入り給えば、本尊の御眼に見え奉るはやがて生身の御眼にみえ奉ると思うべし、かように思えば、本尊に向い奉る功德目出度きことなり」

とあります。今私共にとって、この本尊は単なる仏像ではありません。生身、(真身)の阿弥陀仏がこの本尊に御入り下されている、私共はこのみ仏をとおして真仏を拝まして頂くのであります。私共が本尊の前に念仏申せば生身のみ仏はこれをお聞き下されている。本尊の前に合掌礼拝すれば生身のみ仏はこれを御覧下されています。み仏は無量の光明を以て念仏する私共を照らし下され「攝取して捨てたまわす」私共の心の中にまでみ光は住んで下され、守り導き下さる。かように念仏して、本尊を拝みますと、もはや本尊と真仏とは別でなく、本尊即ち真仏と拝まれるようになるのであります。

日々称名礼拝する念仏者は、たえず如来みほとけの化身指導おそだてみちびきを頂くことができ、未来必ずみ仏の在す浄土に往生することができ。此の世、後の世、只今から未来永遠のお救いを得るのであります。本尊還座大法要を機として、本尊阿弥陀如来の光明益々輝きわたりますように、私共一層念仏生活は精進致したいと念願する次第であります。

地蔵信仰と生活



◇ 地蔵信仰の縁

司会 本日はお忙しいところ有難うございました。一つ、みなさんが、この延命地蔵を信仰されるに至ったご縁についてお話しをうかがいたいのですが。

茂福 私は結婚して三年たっても子供がありませんでしたのでこのお地蔵さんにおたずねをして頂いたところ、三人はさずかるということでした。ところがその後、その通り、三人さずかり、元気に育てさせて頂きました力と、感謝しております。私は昔からお詣りさせて頂いているのですが、ますます



す功德の深いことを感じています
司会 森国さんの場合はどうなんですか

森国 私の場合は親が大変な地蔵信仰者でしたので、子供の時から、お地蔵さんにお詣り

をする事が好きでした。

司会 それは、仲々珍しいですね。

森国 ところがですね。あれは昭和三十九年ですか、妻が自動車事故で、大怪我をしましてね、肋骨は十本折るし、骨盤も折ると言った具合で、とても助からぬ筈だったんですが、それが、ともかく癒ったのも、考えてみると日頃私が、お地蔵さんを信仰していたからだと思います、ますます信仰を深めたわけです。妻も、この頃は一緒に、大いに信仰しています。

◇ 科学以上の力を受ける

司会 その外どんなことがありましたか。



茂福 私は食器の類を作っているのですが、いろいろと分らぬ事はお地蔵さん

におうかがいをたてるのですが、これが不思議に、科学的にでも分らぬようなことを、教えて頂き、そこで、それ以来、ずっとお詣り



させて頂いて
いるわけ
です。

司会 水谷
さんの場合
はどうなん
ですか。

水谷 はい。私の長女が、この六月十七日に
ガンで亡くなったのでございますが、ガンと
分りまして以来、私は、少しでも楽にさせて
やりたいと、お地藏様にお祈りいたしまし
た。そのお蔭で、随分痛む筈の病氣も、それ
程に苦しまず、死に際も、心から感謝しつづ
大往生を遂げてくれました。これもお地藏様
の仰有る通りやると立派にできるといふわけ
で、われながら不思議なんです。そのお蔭で、
私は随分とくさせて頂いていますね。

森国 私にも不思議なことがありました。私
の三才の子供が、錢を二個のんだことがあり
ました。当初、知らなかったのですが、子供
がひきつけるように泣きますので、これは大
変と医者につれて行くことになりました。そ
の節、お地藏さんのおふだを、この子に頂か

せて、出掛けたのですが、自動車を待つ内に、
この子が、二つの錢をはき出して、助かった
ことがありました。あれもお地藏さんのお力
と思っています。

◇ 地藏信仰をどんなに生かしているか

出席者

茂福銀一

(製陶業 五十九才)

森国忠一

(運送業 三十八才)

水谷ます

(米穀商 七十才)

司会 編集部

司会 大変みなさん方は、奇蹟的というほど
にお地藏さんに助けられたり、教えを受けた
りしているわけですが、生活の中にどのよう
にその信仰を生かしていますか。

茂福 私は毎朝早くお詣りするのですが、こ

うして、元気でさわやかに、交通地獄の中で
でも怪我一つせず生かされる喜びを感謝し、
今日も又一日宜しく生かして頂きたいと思っ
てお詣りします。毎朝来るのは、しかし、生
かされている私に対して、感謝をして来るの
です。

森国 私の場合、父が早く死にましたので、
お地藏さんを父とも思い、毎日父に会ひに来
る積りで、お詣りしています。そして、その
顔をみて、教えや、お叱りを受けながら毎日
を過すようにしています。なにせ、私はトラ
ックを運転する危険な仕事ですので、先ずお
地藏さんにお詣りして、心を静めて頂いて、
仕事に出掛けます。荒れた心では、必ず事故
をおこします。毎日お地藏さんの顔をみにく
ると、不思議ですね、毎日お顔がちがうんで
すよ。怒った顔の時もあれば、ニコニコして
いる時もあるのです。だから怒っている時は、
今日は自重しないと危いぞと、自分にいいき
かせて仕事に出掛けます。(笑)

司会 水谷さんは、廿四日にだけお詣りにな
るのですが、毎日の生活はどうしていますか

水谷 よいことも悪いことも、皆お地藏さんに申しあげて、反省させて頂いております。お詣りしない時も、いつもお地藏さんを胸にいだいていますので、悪いこともなかなかできません。

◇ 奇蹟と科学

司会 随分奇蹟的なお救いの話を聞きました。それは、近代の科学的な考え方とは矛盾しませんか。

森国 私は横浜で自動車事故を起し、私は助手席にいたのですが、三人とも助かり、自動車は大破したのに助かりました。私達はほおりに出されたわけですが、これなどは科学では究明できない事なんで、一寸こうなると、何と言ってよいか分りませんね。科学以前の奇蹟とでもいう以外ないのですかね。

司会 先程、科学でも解決できぬ事が、お地藏さんによって解決できたと言われたがこれはどうなんですか。

茂福 これも、口では説明できませんが、本当に信じておれば、そうした時に教えを受けるのだと私は心から信じています。

司会 茂福さんは、何でもお伺いをするので

すか。

茂福 できるだけお伺いします。人を採用する時とか、大きな取引きをするとかですね。しかし、そのおうかがい通りやって、間違った事は、殆んどありません。これなども科学的には、どうも説明できませんね。信ずる私自身の問題として、解釈するより外、できませんね。

◇ 信仰なくしては伺えない

司会 水谷さんの場合はどうですか。

水谷 私は、ほんとうに困った事以外は、ききません。人生で、この時はどうしようかと、迷いに迷った上で、お伺いすることにしています。

司会 森国さんの場合はどうですか。

森国 私の場合は、皆さんと全然違って、末だ石を一回もあげさせてもらった事がないのです。毎日お顔をみていれば大体お地藏さんの気持ちは分りますから。自分で石をあげるのは、恐ろしくてできないのです。(笑)

司会 奥さんが、怪我した時だけは石をあげたんでしょう。

森国 いや、私はできなかったもので、此処の

奥さんにやってももらったのです。そしたら、かならず癒えるという返事だったので、安心した次第です。又その通りにさせて頂きました。

司会 みなさんのお伺いの仕方にはいろいろあるようですが、伺うという事においては同じですね。

森国 しかし、うかがうという事は誠心誠意伺わねばなりません。又自分の欲得でうかがっては駄目ですね。平生から生かされている事を感謝し、そして、本当に困った時だけ真心をこめてお伺いをする。それでなければ、本当の信仰ではないですね。

司会 世の中にいろいろの信仰がありますが、本当の信仰というものは、やはりそういうものでしょうね。創価学会の信仰などどう思いますか。

◇ 生活と一枚の信仰

茂福 私は富士駅で、学会の人と一緒にいたのですが、信者の行動が誠とにだらしないし、人の迷惑になるような事を平気でやっているんですね。本山に詣ってきたような人が、こんな行動しかできない様では、本当の信仰

でないと思い、私は学会の教えに耳を傾けようとは思いません。

水谷 先祖の位牌や、如来さんを焼くような信仰などは、私には縁のないことです。

森国 私の周囲には学会の人がたくさんいますがその生活や、家庭生活をみていますと、とても信仰している人の生活とは考えられないので、駄目だと思っています。

司会 皆さん方の欲得のない信仰が本物ですね。

森国 隣りの人なんか、自分の親は親とも思

っていないくせに、人に説教ばかりしていませんか。言行一致していません。

司会 お子さん方の信仰生活はどうですか。

茂福 未だ若いですから信仰という程ではありませんが、命日には一家あげて参詣させて頂いております。

水谷 私だけお詣りしますので、一家はまかせてあるというところですが、一同やはり、お守りを受けているという事は、同じように考えています。

森国 私の家の子供は、私が毎日信仰生活し

ているのを、見よう見まねでやっています。仏さんの前に行くと、アンと言って二才の子もおがんでいます。

司会 みなさん方の生活の周囲には、つねに信仰があるという事ですね。

茂福 私の兄弟五人とも、本当に楽しい夫婦生活をし、明るいものです。別に信仰を表に出すわけではありませんが、自然生活の中に信仰が生かされているようです。

司会 いろいろありがとうございました。

光運寺本尊

阿弥陀如来（結跏趺坐像）



- 一、白鳳天平様式、上品下生の来迎相
- 一、材料木曾檜材、漆箔、極彩色、蒔絵、金粉仕上、宝座金具使用、

- 一、総高 六尺三寸八分
- 一、仏身 二尺三寸五分
- 一、九重蓮華座 二尺五分
- 一、飛天光背 高サ 四尺二寸六分 幅二尺七寸三分
- 一、框座基部径 三尺四寸五分
- 一、蓮華座径 二尺三寸八分

彫刻 錦戸新親氏（東京在住）
彫刻 磯貝玉州氏（東京在住）
彫刻 磯貝玉州氏（東京在住）

磯貝玉州氏（東京在住）

光運寺本尊厨子及須弥壇

- 一、春日厨子 黒堅地呂色仕上 金具使用
- 一、総高 八尺一寸七分
- 一、礼盤 間口五尺六寸、奥行四尺六寸一分
- 一、戸文 五尺七寸五分 間口四尺六寸五分
- 一、屋根張 六尺三寸
- 一、須弥壇 間口 七尺六寸 奥行 五尺八寸四分

高サ 一尺五寸
製作者 西尾光堂氏（京都在住）

現地ルポ

「延命地藏尊」

霊験は生きている



「本当に不思議です。私は今日より、本当に地藏尊のご利益を信じ、懸命に信仰したいと思います」

年若く美しい一人の女性が、真剣なまなざしで語りつづけた。

「私は顔面神経痛で苦しみました。痛くて寝られぬ夜も、いくどかありました。色々な医者にもかかりました。しかし、癒しようが無いというのです」

そう言いながらも、その女性は顔をヒクヒクと動かした。

「痛いのですか」

「ええ痛いです。しかし、お地藏様をお願いしてから、余程、楽になりました。」

「あなたは、何故、急にお地藏様を信ずる気になったのですか」

若い此の女性が、信仰の利益をどんなに受けとったのかが、記者には興味があった。

「外でもありません。その石が、重くなった、軽くなったりするのです。此の病気が癒るなら、重くして下さいと祈って持ちあげると、一寸とも持ち上げないのです。ところが、何も考えないで持ち上げると、楽に上りまし

た。何回やっても、そうなんです。」

あの石というのは、地藏堂においてある「おうかがいの石」なのである。この石に願いごとをして、例えば、願いが叶うなら重くしてくれと頼んで持ちあげると、必ず重くて持ちあがらぬというのである。彼女も、またその通りやってみた。ところが持ちあがらぬのである。そして、地藏尊は、この病気は癒ると宣託しているのである。

「こうなった以上は、一心にお願いしたいと思うのです」

彼女には、単なる話としてでなしに、石によって、霊験の度合いが、体認されたわけである。しかし、彼女は、偶然、この地藏尊の所に来たわけではなかった。隣りに母親もついていた、大阪から、わざわざ此の四日市に来たわけである。

「私の息子が家出をしました。八方探しでしたが、一向に見つかりません。結局、お地藏様に頼ろうと、かねて聞いていた此の寺にきて、奥様に相談しました。奥様は早速、おうかがいの石にたずねて下さいました。そして大体の方角と、時期とを示して下さい

いました。ところが、全てその通りの方角から、半年程後に息子の所在が分つたので「す」

涙を出さんばかりに語る中年夫人は、中産階級の身なりもキチンとした人である。こうした靈驗を、再び娘にもさすけてもらいたいとやって来たのである。

「私達は、一から十までお地藏様に頼むわけではありません。自分達の力でやれるだけやってみて、どうしても駄目な時だけ、お地藏様に頼るのです。中途半端な信仰では、お地藏様はソッポを向くのです」

いろいろ聞いてみると、この地藏信仰には、何処か、普通によく言われる呪術信仰とは異なった、真剣さと、理論がある。いわしの頭を、なんでも信仰するという迷信とは、一寸違うようである。それには、此の寺の住職夫人の温かい指導によるところが多いらしい。

「頼まれて、願い事を伺ってあげている内に私のがよくあたるといので、いろいろな人がくるようになりました。しかし、本当に困っている人以外はしてあげません。又自分で、心から信仰している人でなければ

靈驗はありません」

聞くところでは、選挙などの時、候補者がおうかがいに来るそうであるが、その願が当らなかつたと言って罵倒したそうである。こんな気持ちの信者には、一向靈驗はないのである。夫人の気持ちを、本当に受けとれる信者には、地藏尊も、心から助けの手をさしのべるのである。

「私などは、こわくて末だ一度も、石をあげてみた事がないのです。しかし、地藏さんが見て、間違った行為がない様に毎日努力しています。お蔭で幸福に暮しています」

或る若い男は、このようにいった。信仰もここまで来ると、本当のものとなったと言えそうである。自動車を運転して大阪名古屋間を往復しているという此の若い男は、四日市を通る時は必ず参詣しているという。戦争の空襲をうけて焼野原となったこの寺は、戦前立派な地藏講の建物もあったそうであるが、今は簡素な地藏堂と、方丈があるに過ぎない。しかし、早朝から、深夜に至るまで参詣者の跡をたたず、線香とローソクは、何時もつきっぱなしである。

「参詣者の相手をしていると、自分達の寝るひまがないので、今は、自由にしてもらっています」

と、住職夫婦は語っていた。それでも、参詣者の中には、あがりこんで話して行くものも多く、その応待役をしている夫人は、仲々に忙しい。いつしかそこには、夫人を中心としたサロンのようなものができあがっている。

「別に深い信仰談をするわけでもありません。それでも、皆様が、幸福になって行かれるのは、この上なく嬉しい事です」

何のハタタリも無い静かなこの夫人の語りの中に、地藏信仰を通じた宗教が、人々の間に拡がっているようである。単に年寄りばかりでない。青年から、中年の人々も多い。入学頃になると、学生や父兄もワンサと来るようである。この人々にも、単なる溺れるものの神だのみとしての信仰でなく、本当の宗教が芽生えてくる日も遠くはない。三三五々と参詣者が絶えない。靈驗は今も生きているのである。然し生活と信仰に純粋なもののみ地藏尊はその慈恩を垂れたもうのである。

無媒隨錄

須藤隆仙

ある僧籍者の研修会に招かれて話をさせられた。

さいきん、つくづくと考えている仏性の開発ということについて、話をさせてもらった。

選択集の第一章は、じつにこの仏性開顕のことからはじめられる。仏性開顕こそ浄土教の出発であり、それはまた全仏教の根本問題でもある。

話を終えたあと、二三の質問をうけた中に、「仏性といっても自分にはどうしてもわからず、まして、これのことおとり取り出して見せることはできぬから、現代人にこれを説くのは面倒ではないか」というのがあった。正直のところ私は啞然とした。

仏性というのは可能性の問題である。可能性というものは開かれた結果によって実証さ

れるもので、「そのものになり得る資格」ということである。

釈尊はこの資格を実証するために、わざわざインドの王宮に凡身を現わして、八相成道を展開せられ、過去仏の存在を示して可能性の無始無終を弁じ、とくに阿彌陀如来は法蔵菩薩となつて、本迹の理を示して凡夫成道の念仏門を開いて下された。

それらはみな、一切の凡夫に仏性あることを示さんとしたもので、いまの私には、ただこの慈父悲母の実証を深く信じて、念仏往生の道を進みゆくのみである。

しかるに、その仏性がわからぬという。それは阿彌陀如来の五劫思惟も、釈尊の八相成道も信解できておらぬからであると、心中強く痛棒を放ったつもりであるが、相手には通じたか通ぜぬか、私の知るところではない。

私は奉職する寺で、同信会という居士会をつくつて、毎月十五日に念仏会をかねて經典の講座をもっている。住職の上人を中心として開催されるこの会は、人数こそ少ないが十数年の永続を保ち、熱心な妙好人の同唱十念

で開閉される。

ある月の席上、この人たちに私は、この仏性の話をしたことがある。

仏性とは、本来開顕されべくしてあるもの、それは、あたかも、果実の種が、発芽すべき本来的使命を具しているごとく、開発されてこそ、本来の姿なのであるから、人間は仏教を信ずるとか、信ぜぬとかの、選択の可能性はなく、仏になって（仏性開顕）こそ、真の人間生命の完遂ではないか。「一切の衆生にみな悉く仏性あり」との釈尊の教示は、じつに人生の始終を明かされたものであろう。とへたな話ではあるが、懸命に話したものである。

そのとき出席者は、たいへん感激してくれ、「これで信仰ということ、念仏というものが、どうして大切なのか、よくわかりました」と随喜してくだされたのである。

僧籍にあるものが、それを解らぬなどというのは、どこかに自分は在家者の上をいくものだという自尊があるからであつて、そんな自尊はいらぬではないかと、つくづくと自分にいい聞かせたことである。

奈良からもどって

市原雅子

八月初めの五日間、奈良県主催の大和文化講座に参加し、主に奈良郊外の社寺を見てまいりました。奈良へは中学の修学旅行で一度行ったきりでしたが、大和三山の静かなたずまい、仏像の美しさに引かれ、もう一度是非とっていましたところ、九年目にやっとその機会に恵まれました。真夏の雲一つない空に、猿すべり、杏竹桃の紅い花が明るく映え、水蓮、蓮、木槿の花もあちこちに咲いて旅の私達を楽しませてくれました。

古き都、社寺、仏像を愛する人々は多いですが、私が仏像にひかれはじめたのは、中学の美術の先生の影響でした。その先生は大学院を出たての方でしたが、コセコセした人間は大嫌い、御自分の郷里、三条の大鳳を教室に飾つて下さったり、遠足等で説明のメモをすることばかりに追われている生徒を見つ

けると、大きな目をギョロリとさせて、こうして自分の目でしっかり見よと、おっしゃったりしました。

美術史の時間に、専門用語を使いながら、仏像の顔の感じや姿勢、衣紋の美しさ等々、身振り手振りよろしく指導して下さいました。薬師寺の薬師三尊像など先生のお好きな仏像の一つではなかったかと思われま

す。そしてその時、修学旅行でみた仏像の様々な印象は深く心に残り、その後デパート等で仏像の展覧会などがあると、胸はずませて、必らず見に行くようになりました。

中学校の教育はともすれば、皮相的なものに終わりがちですが、何かもっと深みのある指導、将来それが生かされるような魂の呼びかけが行われなくては、真の教育とは言えないように思います。教授する事柄への豊かな愛と学識、その情熱が生徒指導の原動力だと思います。仏師の手から生まれ、暗い堂の中で千何百年もの長い間交わらぬ慈愛の眼差で私達をみつめていらっしやる仏様の静かな偉大さに、いつまでも立ち去り難い思いがいたしました。

お知らせ

十月一日より当事務所住居表示が改訂となりました。

十月以降は左記新住所名にて御連絡のほど、お願い申しあげます。

尚、住所改訂のありました方はその旨御連絡下さい。

東京都千代田区飯田橋一丁目

十一番六号

法然上人鑽仰会

絵	連
話	続

みんなの法然さま

— 真実の奇行 —

高橋良和

さしえ 小林健造

源平のいくさの頃はそぞろ世の無常を感じる武士も多かったなかに、熊谷次郎直実もその一人であるといえる。

華々しく戦場をかけまわり、人の首をはねた武士であればあるほど、今日は人の身、明日は吾が身という心が湧いてきて、ほんとうに道を求める心が深くにじみ出てきたことだろうと思うのである。

熊谷直実は折も折、須磨の浦で平家の可憐な若もの、敦盛の首をはねたことは、歴史に芝居に名高いのであるが、その直実がこの敦盛のことを吾が子にくらべてみて不憫（ふびん）に思ったのは当然のことで、彼はただちに道をもとめて法然上人の弟子になったのである。

上人の庵室をたずねて、直実はじーっと畳に手をついて、ただわっーと泣き伏したのである。

「どうされたのじゃ。」

上人の静かな声が直実の耳に入ったのである。

「わたしは武士でございます。何十回のいくさで何百人の人々をころしました。必ず地獄におちる身でございますのに、上人さまのおことばによりますと、お念仏をすればそのまま救われるのが、ただうれしくって。」

「そうとも、必ず救ってくだされるのじゃから安心するがよい。」

このことばに直実はまたもわっと泣きくずれたのである。なんとという偉大なるおしえであろうか、また大きな法然上人の人がらであろうか。上人の前にひれ伏せばすぐさまそこに救いの道が開かれてゆく、まことにこのおしえが全く万人にびたりとあてはまる立派なおしえであることがわかるよう



である。

この熊谷直実はなかなか熱心な念仏の信者となつたので、たえず人にいうのに、



「わたしは死くしは死んだら、極樂のなかでも一ばんよい極樂である上品上生（じょうほんじょうしゅう）の国に生れる。」と語っていたそうで、こゝと極樂に

関する限り直実は平素の念仏の信仰からいって、当然であると考えたほど人なみはずれた念仏の人であつたといえるのである。

ところでこの直実は奇行の人であつたのか、それとも眞の念仏の行人であつたのかを知るはなしがある。

というのは、この直実は、西方十萬億の彼方の極樂を信ずることが強く、たえず西の方に向つて手を合わせ、念仏をとなえたと思われるのであるが、そうであるから、西の方の極樂をあこがれるあまり、いつも西の方に背中をむけなかつたといわれている。

あるとき京都より関東に赴いたのである。

そのとき直実はどうしたかという、馬に乗ってゆくのであるが、馬の背に鞍をおくのであるが、その鞍をなんと反対に尻尾の方をむけておいて、その上に自分が乗つたのである。

まことにへんなかつこうになるが、馬の首は前を向いて行くが、乗っている本人は尻尾の方をむいているのであるから、人々はみな笑つただろうと思うのである。

然し当の御本人は平氣なもので、鞍の上で関東につくまで西の方を向いて手を合わせていたというから、この直実の行は相当なものであつたといえる。そのとき直実はこんなうた

をつくっている。

浄土にもごうのものとやさたすらん

にしにむかいてうしろみせねば

まことに面白い行ないであるが、この直実の人がらがみられるようである。

この熊谷直実の史実は方々に残っているので、何回か前の大原談義の際の鉦すての藪もあるし、京都の黒谷本山の鑑かけの松もあるし、埼玉県の熊谷市仲町の熊谷寺にはこの直実の史実をつたえるものが残っているのではないだろうか。

この直実はまたこんなことをいったのである。

「建永元年八月に、わたくしは、明年の二月八日に必ず死ぬからもし不審な人があればくるとよい。」

と武蔵国の村岡の市に立札をたてさせたのである。

今も昔も人のうわさはひろがるのが早いので、あちこちにこの立札のことがつたわると、方々からこの市にやってきたのである。

さてこの日の二月八日になって、直実は夜明けに起きて齋戒沐浴して高座の上にのぼり、朝から大きな声で念仏していいよその臨終を待ったのである。

ところがどうであろうか。

一日待ったところが、一向にその体力がおとろえることな

く、念仏の声も更に大きく、臨終の様子がないので、人々がみな変な顔をしてながめていると、直実の曰く

「今日の往生は延期することにした。九月四日にするからその日来るがよい。」

といったので来会の人々は大笑いしてかえったが、承知せぬのは家人で、

「なんとという馬鹿なことをいうのか面目ない。」
という直実は、

「そういうことをいっても仏さまのお迎えがないから仕方がない。これは自分のしわざではない。」

といって平気であった。

然し日のたつのは早いのもで、九月四日になったところ、その少し前から身体の調子が悪く、九月四日にいたって、端坐合掌し、法然上人からいただいた阿弥陀仏の来迎仏をかけて念仏するほどに巳の刻にいたって、口より光を放って、よいにおいがただようなかに、直実は息をひきとったのである。

まことに念仏の行者として実に尊い臨終であるといえる。

必ず直実が念願した上品上生の極楽に生れていることだろうか、念仏を行ずる人の美しい姿である。

ご法語をいただく

われおさなくより法門を習ひたるものにてあるだにも、念仏より外には何事をかして往生すべしとおほへず。ただ念仏ばかりをして、弥陀の本願をたのみて、往生せんとのみおもひてある也。

（津戸三郎へつかはす御返事）

法然上人は十五才のときに、学匠皇円の室に入つて、仏教修学を始められました。そして僅か三年の間に基礎的な勉学を終つて、十八才のときに法然房源空と称されました。その後は各宗の碩学について、各宗の奥義を学ばれました。その結果、御伝に

「上人智慧第一のはまれちまたにみち、多聞広学のきこえ世にあまねし。おほよそ我朝にわたれる聖教伝記眼にあてずといふことなし」とあるように、一流の大学者になられました。特に大藏經については五遍も読破されたといわれています。

しかしいかに広く勉学しても、学問だけで

は結局上人の信仰心に満足を与えることができませんでした。このことを御伝は

「上人聖通諸宗の教門にあきらかなりしかば、法相三論の碩徳、面々にその義解を感じ、天台華嚴の明匠、一々にかの宏才をほむ。しかれどもなほ出離の道にわづらひて、身心やすからず、順次解脱の要路をしらんがために、一切経を、ひらき見たまふこと五遍なり。一代の教迹につきて、つらつら思惟したまふに、かれもかたく、これもかたし」

と記しています。そして遂に善導大師の一心専念の文に出会つて、かつ然として心が開けることになりました。

「来世の凡夫、弥陀の名号を称せば、かの仏の願に乗じて、たしかに往生を、うべかりけりといふ、ことはりを、おもひさだめ給ぬ。これによりて、承安五年の春、生年四十三、たちどころに余行をすてて、一向に念仏に帰し給ひけり」

このご法語は、以上のようなご体験から到達したご信仰について申されたものであります。津戸三郎に対してお示しになったお言葉は、更に次のように続けられています。

「この念仏を申事は、ただわが心より弥陀の本願の行なりとさとりて申事にもあらず。唐の代に善導和尚と申候し人の往生の行業にをいて、専修雑修と申す二つの行をわかちて、すすめ給へる事也。専修といふは、念仏也。雑修といふは、念仏の外の行也。専修のものは、百人は百人ながら往生し、雑修の者は千人が中にわづかに一二人ありといへる也」

法然上人は、あくまで善導大師の教学に従っているだけであると申されています。しかし事實は細部の点で、善導大師の説を止揚し、徹底させているのですが、ご自分では単に善導大師の真意を表したにすぎないとされています。ましてお念仏の道をご自分の修学から得られた等は、けつして申されていません。「煩惱具足の凡夫、順次に輪廻の里を出ぬべきは、ただこれ浄土の一門のみなり。これにつきて、諸家の解釈蘭菊美をほしきままにすといへども、唐朝の善導和尚、弥陀の化身として、ひとり本願の深意をあらはし、我朝の法然上人、勢至の応現として、もはら称名の要行をひろめたまふ」

御伝序文の一句の通りであります。

編集後記

○今月号は、四日市市の光運寺の入仏と、そこにある延命地藏尊について特集しました。錦戸先生のご苦心談や、延命地藏尊の靈驗など、いろいろと今日の問題として、有意義なものと存じます。ご精読下さい。

○靈驗の問題を、単は迷信とぬぐいさつてはなりません。しかし、この靈驗が、迷信とならぬ為には、それを受けとる信者の心構えが必要と考えられます。竹中先生や、座談会を熟読してみたいものです。

○四日市市の光運寺住職、飯田信弘師は、大正大学出身の英才で、現在住職として寺の復興や、檀家の指導に馬力をかけています。また浄土宗々会議員の若手斗士としても活躍中です。

○この特集に関連して、執筆せられた先生方や、ご協力頂いた各位に対して、厚くお礼を申し上げます。

○社会事業に一生を捧げられ、偉大な業績を残された長谷川良信先生が、逝去されました。心から哀悼の意を表し奉ります。来月号は浄土にもいろいろご協力頂きました縁もありますので、先生の特集をしたいと存じ居ります。

○浄土宗では、今般「往生浄土の理解と表現」という本を出版しました。広告にも出して置きましたが、「往生浄土」という最も重要な問題を、現代人としていかに受けとるべきかというところが、浄土宗の学人教師七十人の方によって語られております。

○浄土宗教学大会は、今年

は東京で開催されます。ここでは、「宗学を教育者にどのように生かすか」「各宗が直面している宗学の問題」などが討議されます。浄土の皆様も、是非参加して、この問題をともしどもに考えていきたいと思ひます。

○八月号、小布施弘学師の「ベトナムに祈る」の中、二一頁上段の「実は」は「実に」同下段「明鐘」は「明星」二二頁上段「縁側」は「縁側である」は「縁側である」同上段「南はベトナム民主共和国」は「南はベトナム共和国」の誤り九月号一七頁上段「四十度線」を「三十八度線」、十八頁下段「今こそ信仰として」は「今こそ信仰人として」に訂正。小布施師並びに読者の方々に御迷惑おかけ致しました。訂正旁々おわびします。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一力年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六
発行所 法然上人饗仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

祝 光運寺本尊入仏開眼大法要

同	同	同	責任役員	代表役員	三重山 光運寺	
					飯田 信弘	阿弥陀如来
同	同	同	竹中 信常	伊藤 重兵衛	造 顯世話人	
					稲垣 清市	棚橋 由松
同	同	同	飯田 有心	生駒 潔	長谷川 由一	
					長谷川 直藏	小森 正紀
同	同	同	三枝樹弘道	加藤 光二	宮田 長兵衛	
					霜 尙男	福岡 順三
同	同	同	後藤 てん	加藤 軍治	田中 三郎	
					田中 久義	山本 宏

